



須崎工業高等学校

Tsunamiと 私たち

小津高は避難所に塩などの備蓄を提案した。

意識変わった

小津高の参加者は2年生4人。外国の生徒と英語で話しながら、指導役の赤神青空さん(17)は「簡単たいという動機で『防災に強くして湯も使えないことを考い関心はなかった』と口をそえ、水で戻したアルファ米を

目標と責任胸に準備

10月末、高知市永国寺町の県公立大キャンパスの一室に、20人の高校生が集まつた。高校生サミットに向けた学習会。津波で壊された街の写真を示しながら、指導役の長崎政浩・高知工科大学教授が語り掛ける。

「必要なのはパッション。一度とこいう悲しいシーンを見たくないという祈り、使命感、熱い思いをどう伝えるかです」

③ 県内校



サミット本番に向け、県内高校生たちは真剣な表情で研究発表の練習に励んだ(10月30日、高知市永国寺町)

須崎工業高は過去の災害で須崎市が受けた被害の状況や、生徒が作った簡易トイレを紹介。須崎高も、住民の個別避難ルートづくりを手伝う取り組みなどを発表した。高知西高は避難生活での食料不足を考え、企業や個人への農業推奨を提案した。高知県民には地震の経験が少ないことを指摘し、注意喚起の必要性を語ったのは土佐塾。

もらえたら」と話す。震災について学ぶうち、メンバーの意識も変わった。「地震が来たら、近所のおじいちゃんたちを誘導しようと思う」「もっと知識を深めたい」。自分たちが防災のリーダーになる。そんな使命感が芽生えている。

ハートが大切

県内からの参加校はもう1校ある。議長校の大方高だ。今井恋さん(15)と今村琳花さんはもう1年生2人が重責を担う。

「ウエルカムトウクロシオチヨウ。マイネームイズ…」

今月11日夕、黒潮町役場で議事進行の確認が行われた。支社・早川健

暗がりで試食した。「芯の残つ時、畦地和也・町教育次長が発表を考え中で、同校の家庭クラブが過去に行った調査に着目した。被災した直後、避難所の食事は、飯やパンが主だったとの内容。停電して湯も使えないことを考へ、水で戻したアルファ米を小さく備えも大事だと思っていました。」

赤神青空さんは「簡単には『伝えるように…』。畦地和也、結果は大きく違う。さんは、参加者が将来救うかもしれない世界中の命への思い、会議の準備や運営に当たる数百人への感謝を「常に心に」と語った。上手に英語を話すことよりも、議長には「ハート」が大切だからだ。

2人は7月から準備に入つた。10月には東京で官僚ら40人以上が集まる会議に出席。い、会議の準備や運営に当たる数百人への感謝を「常に心に」と語った。上手に英語を話すことよりも、議長には「ハート」が大切だからだ。

「ハート」が大切だからだ。2人は7月から準備に入つた。10月には東京で官僚ら40人以上が集まる会議に出席。い、会議の準備や運営に当たる数百人への感謝を「常に心に」と語った。上手に英語を話すことよりも、議長には「ハート」が大切だからだ。

2人は7月から準備に入つた。10月には東京で官僚ら40人以上が集まる会議に出席。い、会議の準備や運営に当たる数百人への感謝を「常に心に」と語った。上手に英語を話すことよりも、議長には「ハート」が大切だからだ。

この1ヶ月は、リハーサルや英文読み上げの練習が本格化。発音や間の取り方、そして「ハート」の持ち方も考えている。

不安はある。ただ、「いつも(大人が)手助けてくれるわけじゃない。自分たちで考へないと(今井さん)」。

県内の高校生たちは、それの目標や責任感を胸に、

本番に臨む。

報道部・森田千尋、幡多

「世界津波の日 高校生サミットin黒潮」25、26日開催



世界津波の日 高校生サミット開催!

須崎工高生参加発表①